

# 爪形文土器段階における石材運用 —野国タイプ型石斧の再定義と評価を中心に—

The Utilization of Stone Materials in the Phase of the Tsumegatamon-style Pottery  
- Redefinition and Evaluation of the Noguni-type Stone Adze -

大堀 皓平  
OHORI, Kohei

---

ABSTRACT : In the paper I study stone tool industries in the phase of the Tsumegatamon-style pottery. It has been considered that these assemblage has a distinctive characteristic that is different from the counterparts in other periods. Especially, edge-polished stone adze in the assemblages shows characteristic designs and distinctive manufacturing technique. Then I tentatively define it as the "Noguni-type stone adze".

In this phase, these was a variety of the assemblages in the light of presence and absence of the Noguni-type stone adze and chart materials. This implies that the people used a variety of localities for procuring raw stone materials. The industries in the phase of the Tsumegatamon style pottery were characterized by the distinctive ways of procuring and reduction of stone materials. Because of the peculiarities in the industries during this period, I tentatively define it as the "Pre-Ryukyu Jomon style industry", and point out the possibility that this tradition was not succeeded by the following "Ryukyu Jomon style industries".

---

## 1. はじめに

沖縄本島諸島において本格的な石器製作がみられるようになるのは、縄文時代早期に相当する爪形文土器の時期である。この時期の石器群は、全面研磨の磨製石斧がみられないことに加え、打製石器類が石器組成から欠如するなど周辺地域や前後の時期との類似性が認められない点に特徴をもつ。そこで本稿ではこれまでに報告されている遺跡から出土する石器を対象にその石材運用とそれに伴う石器製作技術を分析し、該期石器群の特色についてより具体的に明らかとしていきたい。

## 2. 爪形文土器段階の遺跡より出土する石器（図1・2）

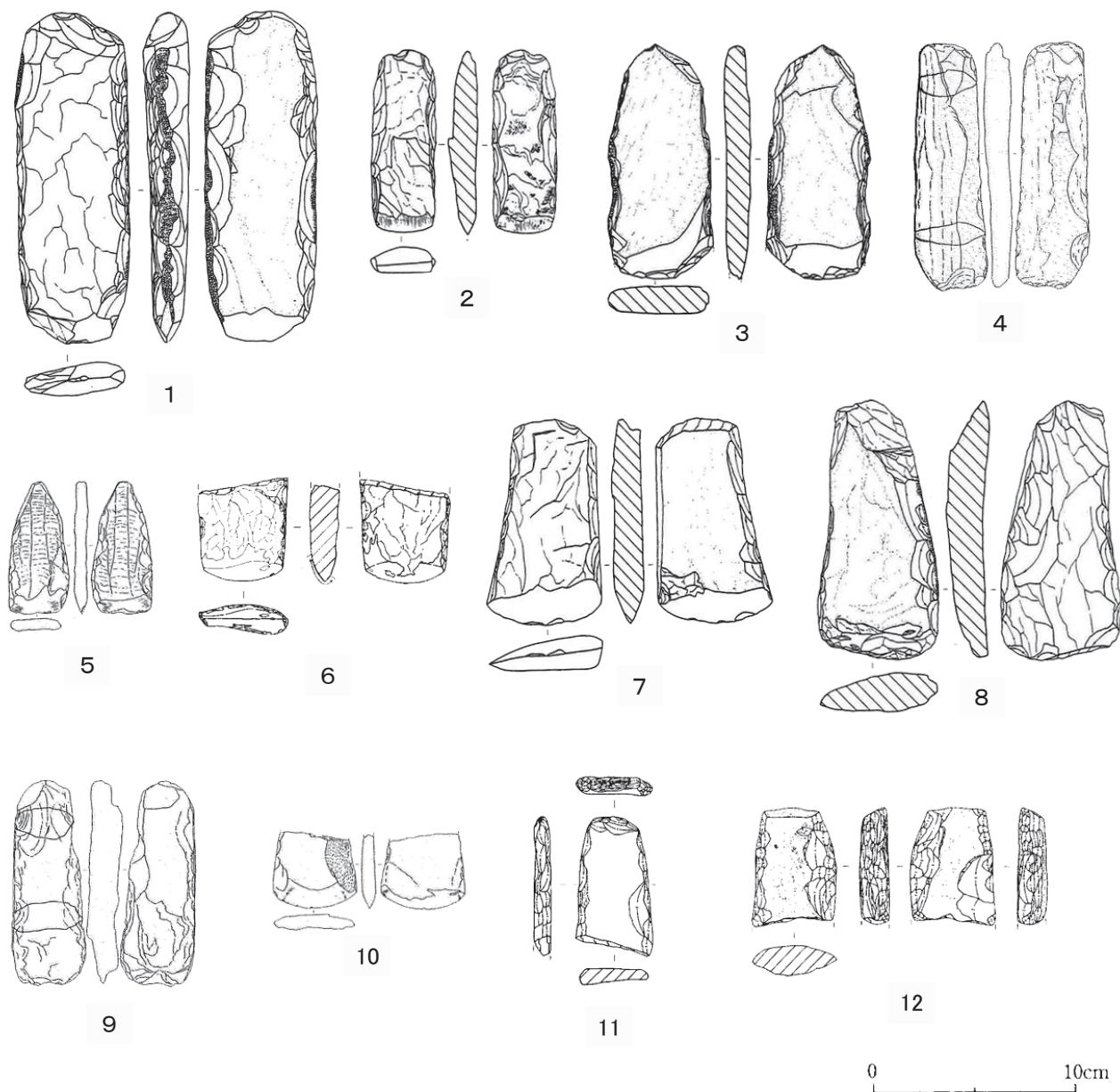
### 2-1 読谷村渡具知東原遺跡

この遺跡は低平地に立地し、下層に爪形文土器を主体とする層、上層に曾畠式・室川下層式などの条痕文系土器を主体とする層とに分かれている。自然遺物にはリュウキュウイノシシが卓越し、ほかに貝・魚骨が出土している。年代値については、炭化物・貝殻を試料に 6450 ~ 6670 B.P という放射性炭素年代測定値が得られている。下層出土の石器には、石核、縁辺に不規則な微細剥離を伴うチャート製のスクレイパーや尖頭器、大形の打製石斧、刃部磨製の石斧、敲石類の計 7 点が出土している。ただしチャート製品については上層での出土が主体的であるので、巻き込みによる可能性が高いと考える。またイノシシ骨製の骨錐も得られている。

大形の打製石斧は 2 点得られている。1 は 30 cm 弱で、板状礫を素材としている。図 1-4 は周縁を直接打撃によって剥離調整が行われ、両側面には鋭い稜が形成されている。同図 9 も同様で、片側側面は欠損しているが、残る右側縁はやはり鋭い稜が形成されている。同図 5 の刃部研磨の石斧も板状の礫を素材が素材と推定され、大形の打製石斧と同様に側面の稜が鋭く調整されている。刃部には刃縁に対して垂直方向に線条痕が残されるため、機能は横斧であると想定される。石材はいずれも緑泥片岩と報告されているが、管見の限りでは他の報告書にある緑色千枚岩・片岩と同じ岩石である。

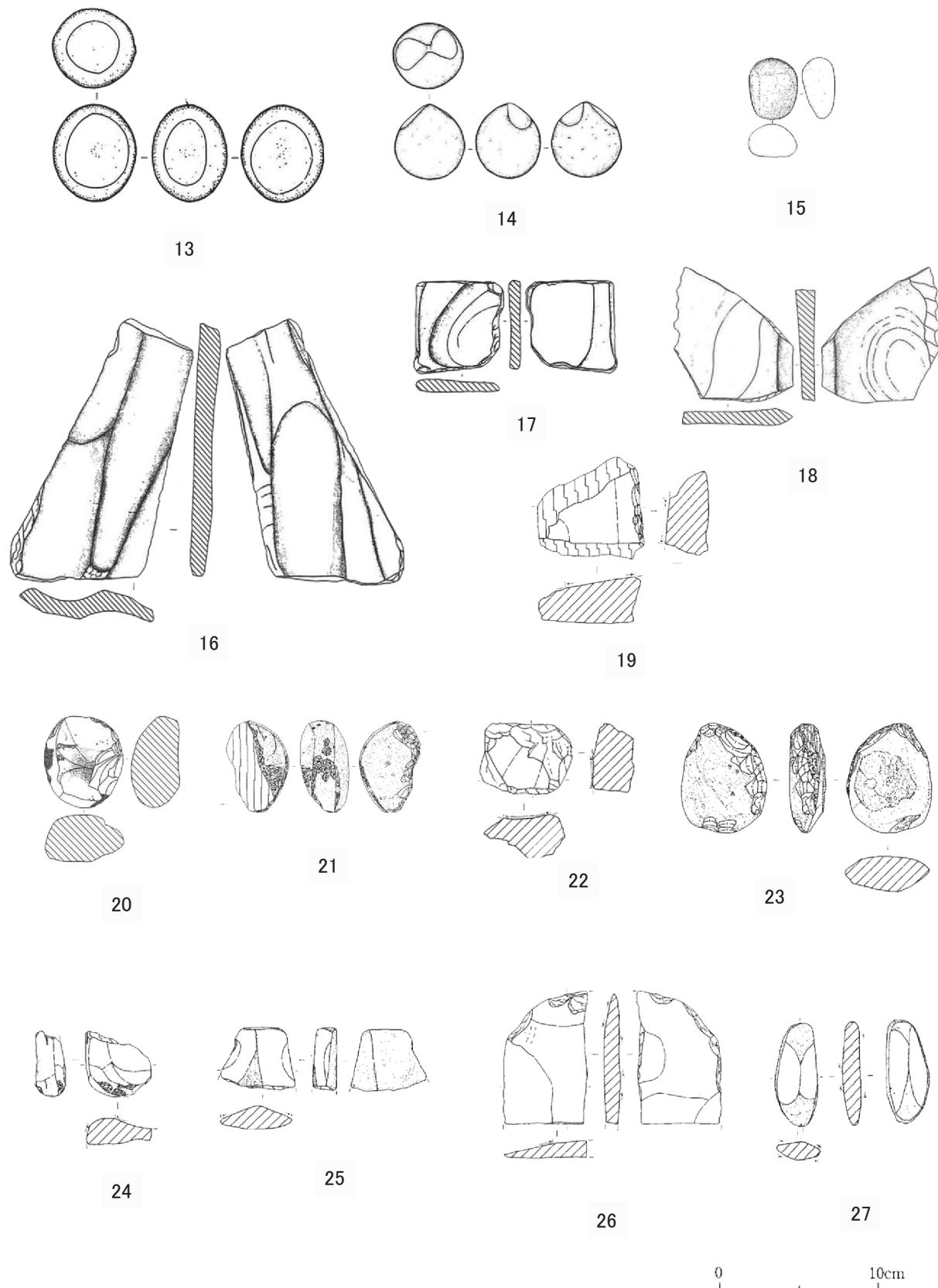
## 2-2 嘉手納町野国貝塚B地点

海岸砂丘に立地する。この遺跡でも爪形文土器と条痕文系土器が合わせて約4000点という膨大な量が、渡具知東原遺跡と同様に出土量のピークとなる層が層位的に分かれた状態で出土している。またこの遺跡では爪形文土器が主体となるVb層から間層を挟んだV層に無文土器が出土している。放射性炭素年代測定値では、無文土器が出土したV層が $7130 \pm 80$  y.B.P.、ヤブチ式が出土したVb層が $6250 \pm 150$  y.B.P.という測定結果が得られ、爪形文土器より古手の土器という認識がなされている。爪形文土器の層からの自然遺物にはリュウキュウイノシシ骨が卓越して多く、他に貝・魚骨などがみられる。石器には30cm近い大型品を含む刃部磨製石斧、石斧様石器、敲石類・石皿B式・砥石などがみられ、爪形文系が主体のIV・V層



1・2・3・7・8・13・14・16～18・20・21：野国貝塚B地点  
4・5・9・10・15：渡具知東原遺跡  
6・11・17・19・22～27：新城下原第二遺跡

図1 爪形文土器段階の石器（石斧）



13・14・16～18・20・21：野国貝塚B地点  
15：渡具知東原遺跡 17・19・22～27：新城下原第二遺跡

図2 爪形文土器段階の石器（敲石類、砥石）

では 44 点が出土している。また渡具知東原遺跡と異なり野国貝塚では石器中で石斧が最も多く 17 点が得られている。

この遺跡から出土した大形の刃部磨製石斧は正面に割り取られた面があるが、裏面には自然面が残ることから石材である緑色千枚岩の片理構造を利用して板状の原石から割り取られた粗割り片を素材としていることが分かる。厚さの調整はこの素材片作出時のときのみで、次に両側縁を打剥して側方の形状を調整している。この側方調整は側縁に鋭い稜が形成されるのが特徴である。打剥調整の後、下端のみを研磨によって付刃することで渡具知東原遺跡の大形石斧と異なり刃部磨製石斧となっている。この側方調整の特徴は 20 ~ 10 cm 大の刃部磨製石斧も同様である。中形・小形の刃部磨製石斧も大形の局部磨製石斧と同様に、板状礫もしくは板状に割り取った粗割り片を素材としている。両側縁の打剥調整も同様で、鋭い稜が形成される場合が多い。側面に敲打痕を残す資料もみられるが、部分的なものが多いことから敲打調整痕というよりは着柄による使用痕と考えられる。刃部には刃縁に対して鉛直方向に線条痕が残されており、横斧としての機能が想定される。

石斧様刃器は「刃部のみ磨いて付刃する製作技法は刃部磨製石斧に類似するが、扁平小型のため斧のように付柄しての使用に耐えることが出来ず、手に握ってナイフのように使われていたことが考えられる」ために石斧とは別に分類したとされている。これを改めて観察すると、表面は自然面もしくは片理構造を利用した剥離面で、これは石斧と同様の素材である。また刃部のみ研磨して両刃を付刃するのも石斧と同様である。しかし側面に鋭い稜が形成される資料は少なく、むしろ打撃や折り取りによって面を形成する資料が多い。そのため横断面がレンズ形になる刃部磨製石斧に対して、石斧様刃器は長方形となるのが大きな違いと言える。

一方で野国貝塚では無加工の原石も出土している。原石には 30 cm 大の緑色千枚岩の板状礫が多くみられ、形状からおそらく刃部磨製石斧や石斧様刃器の素材であると考えられる。この石材は沖縄本島北部の名護層もしくは慶良間諸島慶良間層に求められる。従って遠隔地石材の獲得行動が行われ、しかもほぼ原石の状態のまま、舟を用いて生業空間に運搬されていた可能性が考慮される。

### 2-3 うるま市藪地洞穴

藪地島の洞穴遺跡である。表採された資料はヤブチ式土器が主体で、僅かに東原式もみられる。ほかに石斧、敲石、貝製鏃がみられる。

### 2-4 那覇市箕隅原 C 遺跡（東門 2000）

低湿地遺跡で、石器には大形の打製石斧・刃部磨製石斧が大量に出土している。出土木材には島外の木材であるとされる。報告書が未刊のため、詳細は不明の状態である。

### 2-5 宜野湾市新城下原第 II 遺跡

海岸砂丘上に立地する。野国第 4 土器とされる無文土器が X I 層に、間層を挟んでヤブチ式土器が IX 層から層位的に出土している。動物遺体はリュウキュウイノシシが圧倒的主体を占め、次いでウミガメ類・トリ類。リュウキュウイノシシ骨にはカットマークがみられるとされる（久貝 2007）。放射性炭素年代測定もなされており、IX 層は  $6080 \pm 50$  B.P という測定値が得られている。石器には刃部磨製の石斧、敲石・磨石類、砥石が 12 点出土している。一方で貝製鏃、貝刃、貝錘、ヤス状骨製品など石器を補完するような器種の貝骨製品が出土している点が注目される。

刃部磨製の石斧はいずれも打剥によって側縁に鋭い稜が形成され、刃部のみを研磨して付刃している。

## 2-6 南城市武芸洞遺跡

河岸段丘状に立地する。ヤブチ式・東原式が出土している。動物遺体にはリュウキュウノシシが圧倒的多数を占める。石器には刃部磨製の石斧、敲石磨石類、砥石、石皿、スクレイパーなどで計10点ほど出土している。また新城下原第II遺跡と同様に貝鏃が出土している。

刃部磨製石斧は表採を含めて4点が得られている。いずれも板状の礫を素材とし、両側縁が直接打撃によって鋭い稜が形成されている。刃縁には刃部に対して垂直に線条痕が残されているため、横斧として使われたとみられる。

## 2-7 爪形文土器段階の石器組成

これまで確認してきた石器から、加工整形を伴うものは打製石斧と刃部磨製石斧及び石斧用刃器に限られ、明確に爪形文土器に伴う打製の剥片石器はみられない。これに乳棒形で先端部を多用する敲石磨石類や砥石といった礫石器が伴っている。これらの石器の組み合わせはどの遺跡でも概ね共通しており、これが該期の石器組成であったとみられる。この組成は後述のように前後の時期とは異なることから、筆者は「前琉球縄文式石器群」(表1)という名称を付すことを提案している(大堀2014)。ただし石器の出土点数や組成比には遺跡間で差異があり、遺跡の性格に違いがあったことを窺わせる。また貝製鏃が新城下原第II遺跡や武芸洞遺跡で出土しており、打製の剥片石器が担った機能については石以外の素材による道具が少なからず利用されていた可能性が高い。

上記のように、石材加工を伴う石器は石斧とそれに類似した石斧様刃器に限られるが、石斧について新田重清は、野国貝塚にみられる局部磨製石斧を野国タイプ石斧、渡具知東原遺跡にみられる大型の打製石斧

時代区分	石器技術の段階	打製石器		磨製石器		礫石器	石器群の性格
		複合型	単一型	複合型	単一型		
		奄 沖	奄 沖	奄 沖	奄 沖		
後期旧石器時代	第I段階		△ △			▲ ▲	低緯度旧石器
貝塚時代	前1期					▲	前琉球縄文式
	第II段階			◎	△	○	
	前2期			○	○	○	
	第III段階?			○	○	○	
	前3期	▲	○ ○	△ △	△ △	○ ○	
	第III段階	▲	△ ▲	△	△	△ ▲	
	前4期	△ △	△ △	◎ ○	△ △	◎ ○	
	前5期	△ △	○ △	◎ ○	△ △	◎ ○	
	後1期	△ △	○ △	◎ ○	△ △	◎ ○	
	第V段階			△ △	△ △	○ ○	琉球縄文式
	後2期			▲ △	△ △	○ ○	続琉球縄文式
グスク時代		▲		▲ ▲	△ △	○ ○	グスク式
		▲		△ △	○ ○	◎ ○	

◎ 平均して遺跡より二桁以上出土 ○ 平均して遺跡より一桁から二桁程度出土  
 △ 平均して遺跡より一桁出土 ▲ 時期全体で数点のみ出土

表1 奄美群島・沖縄本島諸島における石器群の変遷試案

を東原タイプ型石斧という仮称を与えており、共に次期の曾畠式及び条痕文土器段階にはみられないことを指摘している（新田 2000）。これは該期の石材運用の特徴を考える上で極めて重要な見識であるので、この野国タイプと東原タイプについて検討してみたい。

### 3. 石斧の製作工程

爪形文土器段階の石斧は、これまでみてきたように 30 cm 近くに達する大形の打製石斧及び刃部磨製石斧と、10 から 20 cm 大の局部磨製石斧及び石斧様刃器が挙げられる。これらのうちで完形の磨製石斧の計測値を確認してみると、器種ごとでほとんど同じ大きさになっていることが分かる（表 2）。このことから、石斧のデザインが極めて規格的で、統一された形状となるように製作されていたことが理解される。

次にこれら石斧の製作方法について、多くの資料が出土する野国貝塚 B 地点を例に考察してみたい（図 3）。第一段階として石斧の素材となる石片の作成が挙げられる。この石斧素材には板状の自然礫のほか、石材である緑色千枚岩・片岩に特徴的な石質である層理構造を利用して打割した粗割片を用いた資料が認められる（写真 1）。この粗割片には表裏の片側面のみに打割面がみられるものと、表裏両面に打割面がみられるものとが認められる。その次段階の未成品と考えられるのが図 3-1 の資料である。この資料は両側面と表面側下端部に直接打撃による剥離調整がみられ、非常に鋭利な稜が形成されている。しかしそれ以外の表裏面及び基部には自然面を残している。研磨による付刃の前段階の資料と想定される。同様の資料は図 3-2 にも認めることができ、この資料も両側面と下端部が直接打撃によって剥離調整され、側縁・下端に鋭い稜が形成されているが、やはり付刃はされていない。この工程の後、図 3-3～7 にみられるように、大形の石斧は側面に敲打調整がなされている資料が多いことが認められる。特に図 3-4 は付刃がなされず、側面の剥離面が敲打によって潰れた状態の未成品である。この資料によって、敲打調整が打剥調整と付刃の間に行われる工程であることが窺える。また中形の石斧には敲打痕が認められないことから、大形石斧にのみ行われる作業であると考えられる。続いて研磨調整であるが、図 3-3 と 6 の大形石斧、8～14 の中形石斧には身部の研磨調整が認められる。研磨調整は層理構造を利用した打割面に対し、比較的弱い研磨がなされており、刃部のような明確な磨面を形成されるには至っていない。大形石斧である図 3-6 のみは両側面に研磨によって定角をなし、あたかも定角式磨製石斧のような形状を呈するが、全ての石斧資料に研磨がされるわけではなく、かつこの資料以外に側面の研磨調整は認められないことから、おそらく石斧の厚さ調整のために必要に応じて行われる作業と推定される。同様の身部の研磨調整は武芸洞出土資料にもみることができる。さらに次段階の未成品がみられるのが図 3-4 である。この資料は背面の大部分には自然面が残るが、上記の 2 点と異なり表面は剥離面となっており、石材を打割して板状にしたものを石斧素材としていることが分かる。両側面と裏面下端部には直接打撃による剥離面があり、さらに表面側下端のみ付刃のためとみられる磨面が認められることから、付刃段階の未成品であると想定される。以上の未成品資料の検討からは、第 1 工程：素材片の作出、第 2 工程：側面の剥離調整、第 3 工程：下端部の剥離調整、第 4 工程：デザイン等の必要に応じた場合の敲打調整・研磨調整、第 5 工程：下端部研磨による付刃、という工程を経て製作されたと理解される。一方で石斧様刃器も製作工程は石斧と同様であるが、図の 3 点の未成品には、いずれも側面に表裏いずれかの面を打面とした打割によって幅を調整した痕跡が認められる（図 4）。この側面部の打割

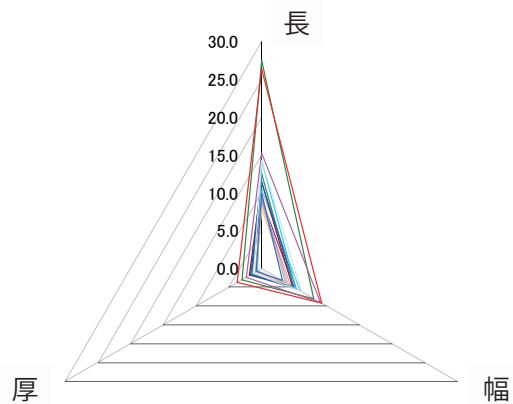


表2 石斧の計測値

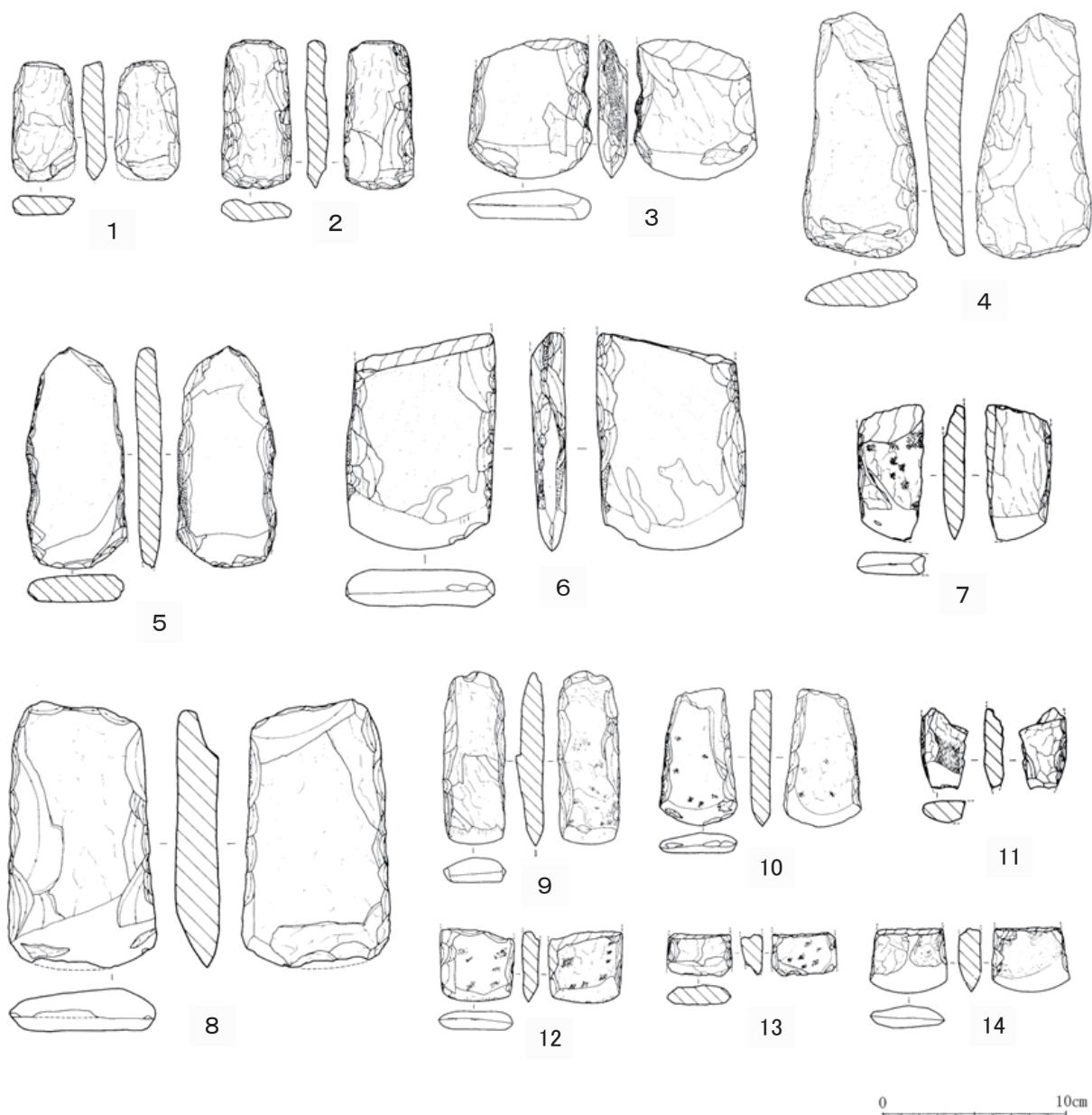


図3 野国貝塚B地点出土の主要な刃部磨製石斧



写真1 局部磨製石斧の表裏面（野国貝塚）

左：粗割面を有する石斧

中・右：自然面を有する石斧

写真2 石斧の側面調整（渡具知東原遺跡出土）

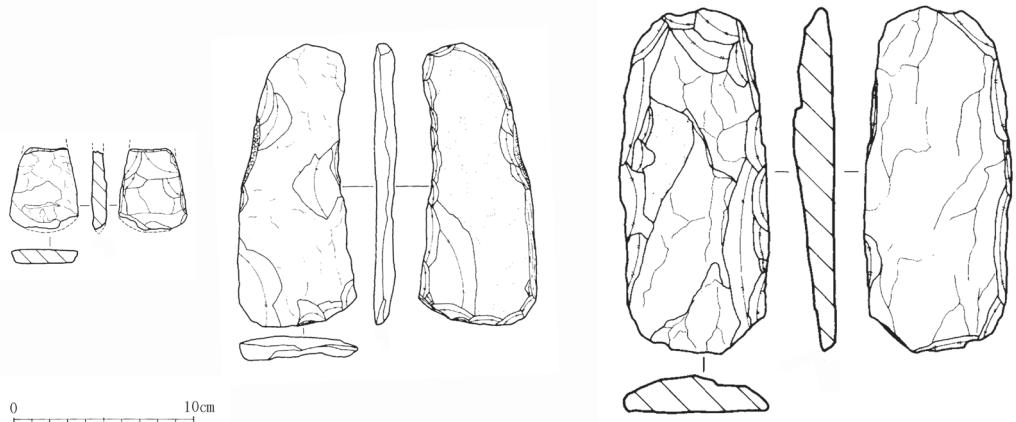


図4 石斧様刃器未成品

は成品にも側面調整がなされていない資料において認められることから、この調整が石斧様刃器の大きな特徴となっていると理解される。

このように野国貝塚B地点出土の石斧を製作工程という観点から検討すると、大形・中形石斧、石斧様刃器は製作工程上でほとんど変わらないことが理解される。ここで渡具知東原遺跡に出土している東原タイプ式石斧との差異が注目されるが、周縁の打剥調整や身部には弱い研磨が1点のみ認められるなど、野国タイプ式石斧とされる刃部磨製石斧とは付刃以外にデザイン、製作技術上で何ら相違点が見出されない(図1)。従って、東原タイプ式石斧は野国タイプ式石斧の附刃前の未成品と考える。

以上のように、該期の刃部磨製石斧には石材の層理構造を利用した素材作出と、鋭利な稜を形成する側面調整の2点に大きな特徴が認められる。この2点の特徴をもつ該期の石斧を、新田の提唱した名称を踏まえて「野国型石斧」と仮称する。

#### 4. 条痕文系土器段階の石器(図5)

爪形文土器段階の前琉球縄文式石器群及び野国式石斧が、後続する曾畠式土器時期に継承するのかを検討するため、この時期に出土する石器について検討したい。ただし該期の石器は爪形文土器段階以上に出土点数が少なく、現時点では渡具知東原遺跡、野国貝塚B地点、伊礼原遺跡の3遺跡に限られるという状況である。

##### 4-1 渡具知東原遺跡

Ⅲ層で条痕文系土器が主体的に出土している。Ⅲ層中では磨製石斧、礫石器系列の敲石磨石類に加えて、報告書中にはチャート製の石槍・ドリル、スクレイパー、石核が新たに出現している。石槍は資料を実見する限り5cmに満たない小形のもので、背面に側縁から求心方向に剥離が施されている。腹面は無加工で素材剥離時のままである。このような特徴から、石槍とするよりはドリルと目されるべき資料である。そのドリルは押圧剥離によって尖らせた先端部に使用時に生じたとみられる微細な衝撃剥離が認められる。スクレイパーとされる資料は明確な刃部のブランディングが認められないことから、所謂U Fといわれる資料である。さらにこの遺跡では13個のチャート製石核も出土しており、チャートによる石器製作がこの時期より行われていたことを窺うことができる。

またこの遺跡では3点の打製石斧と4点の局部磨製石斧、12点の磨製石斧と報告書中で半磨製石斧とされる石斧が出土している。打製石斧は爪形文土器段階とは異なり、10cm前後の大さくなっている。刃部磨製石斧は板状礫の両側面を打剥調整した後、端部を研磨して付刃されるが、野国型石斧と異なり側面部は

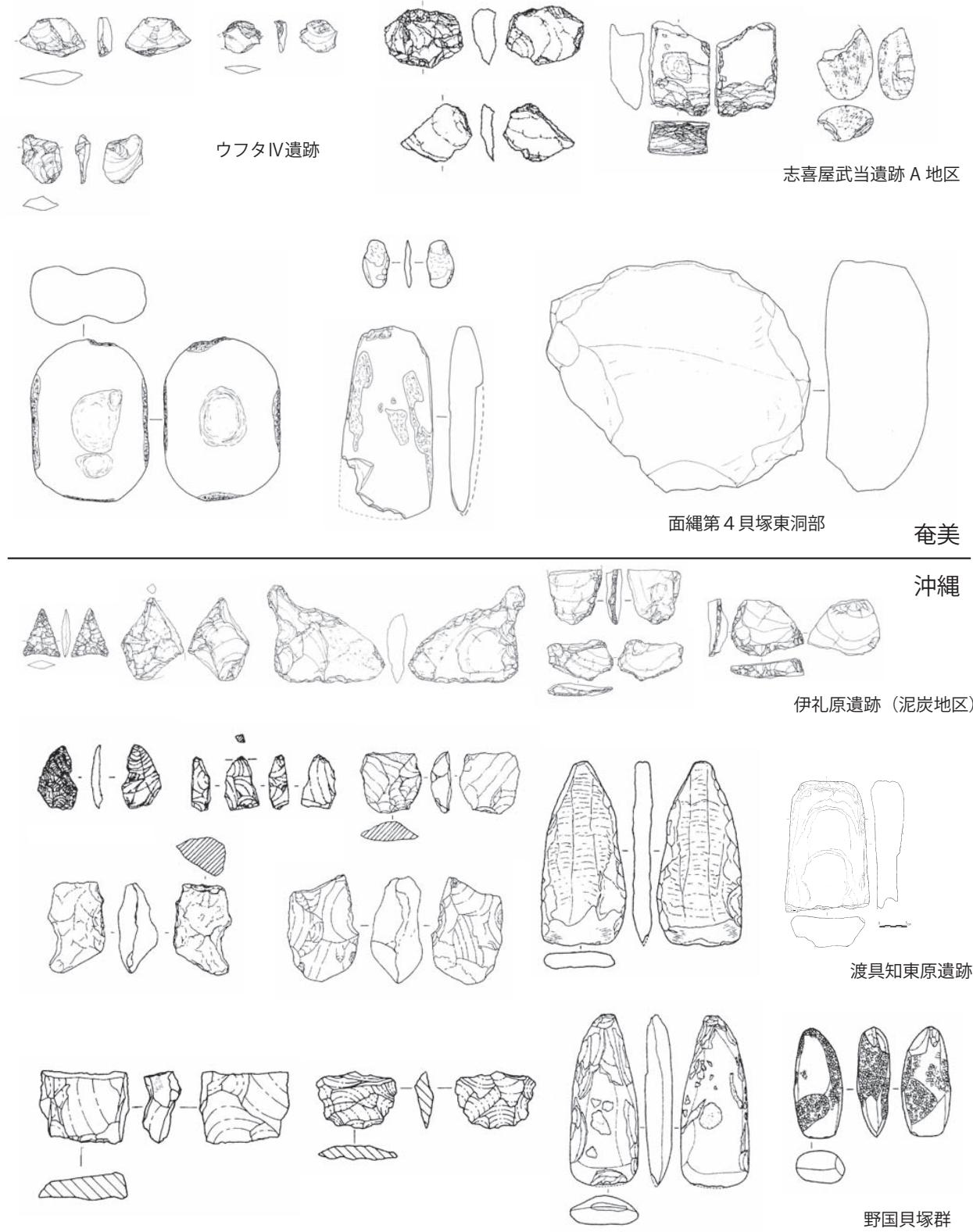


図5 曽畠式及び条痕文土器段階の石器 (S=剥片石器 : 33%、石斧 : 20%、石皿 : 10%)

平坦もしくは凸形で鋭い稜は形成されていない。いずれも調整されずに残されている自然面から板状礫が素材であることが分かる。最も多い磨製石斧は撥状や短冊状のもので、刃部を中心に全面を研磨して製作されている。身部の研磨がされるものの、部分的に自然面を残す資料が大半で、この自然面から楕円礫が素材となっていることが分かる。半磨製石斧とされるものは表裏のうちの片側面のみを研磨調整された資料である

が、意図としては磨製石斧と同様のものとみられる。

#### 4-2 野国貝塚B地点

野国貝塚B地点では渡具知東原遺跡ほど良好な堆積状況ではないものの、Ⅲ層において条痕文系土器が主体的に出土している。この層からはスクレイパー、乳棒形磨製石斧、敲石磨石類が出土している。チャート製スクレイパーは報告書中では「下端部に一方向へのチッピングを施し、刃部をつくりだしている」とされるが、実見の限りでは渡具知東原遺跡と同様に使用によって生じた微細剥離であり、これもU Fとみられる。

また磨製石斧は報告書中でⅢ群とされる資料が同じくⅢ層において出土している。このⅢ群の磨製石斧は橢円礫を素材とし、野国型石斧にはあまりみられなかった敲打調整が認められる。

#### 4-3 伊礼原遺跡低湿地区

この遺跡では上記の石器に加えて、チャート製打製石鏃や石匙が出土している。これらの資料は押圧剥離を伴うものでは沖縄県内における最も古い資料となるが、この押圧剥離を含む複数の工程と加工技術を投下して製作されている点において上記2遺跡と異なる様相となっている。

以上のように、打製石器について渡具知東原遺跡、野国貝塚B地点とともに直接打撃によって作出されたフレイクをそのまま利用する不定形石器が主体であるが、伊礼原遺跡では明確な打製石鏃、石匙といった押圧剥離を伴う資料が出土している。特に打製石鏃は県内でも節理面の少ない良質なチャートを素材とし、周縁を規則的な押圧剥離によって調整されるなど、奄美・沖縄の全時期を通じてもかなり精巧な製品である（大堀 2012）。なお石匙は全時代を通じて唯一の出土事例である。ただし今のところ伊礼原遺跡低湿地区以外にみることができない資料であるため、該期の石器技術に押圧剥離が加わったとはみなし難い。現時点では曾畠式土器などと共に搬入されたなどの例外的な要因による資料と考えたい。

また石斧においても野国型石斧にみられた周縁の稜調整がなくなり、身部も研磨された明確な磨製石斧が出現している。デザインにも撥形が加わっているなど、以降の石斧とほぼ変化のない石斧製作と言える。このような石器群は奄美においても概ね共通することからも、爪形文土器段階の石器群から大きく変化した石器群であることを理解することができる。

### 5. 石材獲得とその消費の様相

原石が取り上げられている野国貝塚B地点では、30 cm以上の緑色千枚岩・片岩の原石が多量に得られている。原石は板状の橢円礫や亜角礫が中心である。これら無加工原石の遺跡からの出土によって、局部磨製石斧は石材原産地付近ではなく、集落に原石を持ち込んで製作されていたことが理解される（写真3）。獲得される石材にこのような大形の原石が含まれる背景には、渡具知東原遺跡や野国貝塚



写真3 緑色千枚岩の原石（野国貝塚B地点）

でみられるような大形の野国型石斧の需要にも対応するためと考えられる。緑色千枚岩・片岩が主体的に選択される要因は、主に打剥調整によって石斧が製作されることに対応した剥離に適した石質であることが要因であるとみられる。しかしそれに留まらず、中形の野国型石斧では層理構造を利用した板状素材が用いられていることが先述の検討によって想定されたが、沖縄本島諸島において緑色千枚岩・片岩は、その石質から層理を利用した剥離による素材作出に最も適した石材であることが遠隔地からの大量搬入の要因と考えられる。搬入された緑色千枚岩・片岩は大形刃部磨製石斧・中形刃部磨製石斧・石斧様刃器のいずれかに加工される。大形石斧の場合は一つの原石から1点の石斧が製作されることが予想される。それに対し、中形石斧・石斧様刃器は石器間の接合作業が行われていないため確証は得られていないが、1つの原石から層理構造を生かして板状の粗割片を複数作出し、さらにその板状粗割片の側面を割り取ることによって多くの石斧素材が作出されていたと想定される。武芸洞遺跡では打剥調整によって生じた剥片が出土しているが、これらが2次的利用された形跡はみられないため、石斧製作を目的とした消費的な石材利用であると考えられる。

石斧石材にはほとんどの石器で緑色千枚岩・片岩が選択されている（表3）。これらの石材は沖縄本島とその周辺の離島では獲得できる場所が限られており、現在のところ本島北部の西海岸沿いに分布する名護層か、もしくは本島西側の離島である慶良間諸島に分布する慶良間諸島慶良間層のいずれかに求められる（木崎編 1985）。慶良間層の分布域である渡嘉敷島には爪形文系土器が検出されている船越原遺跡があることから、野国貝塚の報告書中では、石斧石材の獲得地に慶良間諸島が想定されている（沖縄県教育庁文化課 1984）。実際のところ野国型石斧が多量に出土する野国貝塚及び箕隅原C遺跡はいずれも本島中部もしくは南部の西海岸沿いに位置することからも、その可能性は大いにあると言える。今後、船越原遺跡をはじめ、慶良間諸島において石材原産地遺跡の性格を窺わせるような状況の発見が期待される。また敲石類石材には砂岩や安山岩・ヒン岩などが挙げられるが（表4）、これらの石材のうち砂岩は本島北部の名護層及び嘉陽層と慶良間諸島慶良間層、安山岩・ヒン岩は名護層中に含まれ、特に名護市嘉津宇岳などが産地として知られる。いずれにせよ遠隔地からの大形原石を含む石材獲得・搬入には舟が用いられたことが想定され、それによって沖縄本島及び周辺離島に及ぶ広域な石材獲得行動域があったと考えられる。

一方で曾畠式・条痕文土器段階において特徴的となるのはチャートの使用である。チャートは沖縄本島諸島では本部半島与那嶺層や、伊江島伊江層、伊是名島伊是名層や伊平屋島前岳層に求められる。ただし伊江層のチャートは赤色、前岳層は緑色を特徴とするが、該期にこれらのチャート製石器はみられないため、沖縄本島諸島内では本部半島が石材獲得地候補と目される。一方で石斧や敲石類の石材は該期になっても大きな

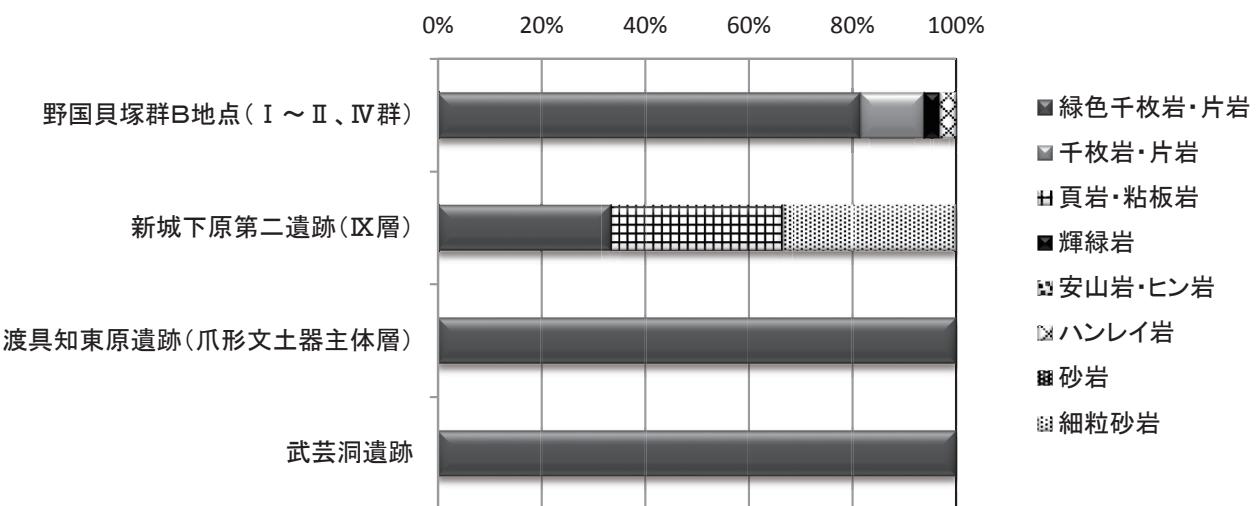


表3 爪形文土器段階の石斧石材

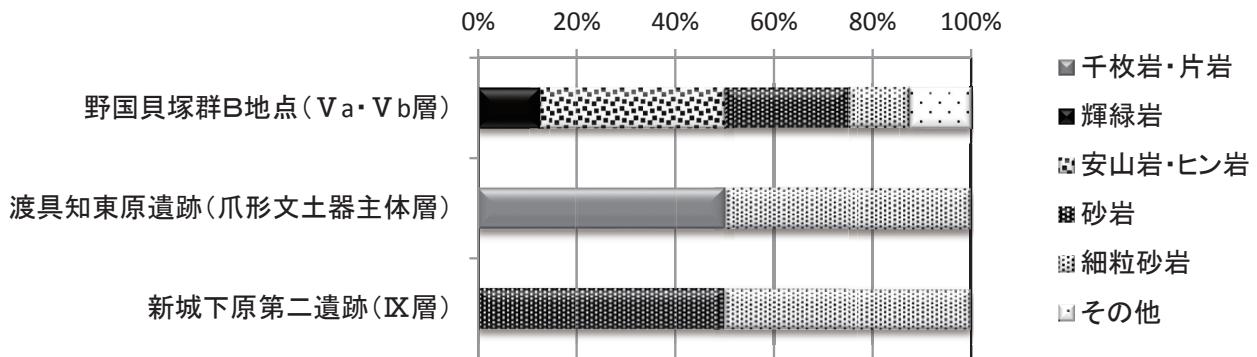


表4 爪形文土器段階の敲石類石材

変化はみられない。従って該期は依然として沖縄本島及び周辺離島に及ぶ石材獲得領域を形成していたことになるが、利用が本格化したチャート獲得のため、石材獲得地に本部半島が加わったことが理解される。またこの時期になると、野国型石斧の途絶とそれに変わる楕円礫を素材とする全面研磨の磨製石斧の製作と剥片石器の導入という2つの変化をみることができる。特に磨製石斧は概ね撥形の製品で、このタイプの磨製石斧も概ね九州以北の磨製石斧と同様のものである（大工原 2008）。この状況からは、該期に起った新たな石器製作は曾畠式土器に伴って縄文型の石器製作技術が流入したものによると考えられる。この縄文時代前期から晩期の石器群を琉球縄文式石器群と仮称しているが、中でも該期はその萌芽期として評価される（表1）。換言すれば、爪形文系土器に伴う前琉球縄文式石器群は縄文文化の影響が全く認められない石器群であると理解できる。不定形剥片石器を伴わず、野国式石斧、乳棒形敲石類、多量の砥石が組み合わさる前琉球縄文式石器群は、該期の沖縄本島諸島で独自の石器群であると考えたい。

他方、石材獲得戦略を加味すると、琉球縄文式石器群の萌芽期における石材獲得行動は、石器石材にチャートが新たに加わることに加え、石斧デザインの変更によってその石材も海岸や河川転石とみられる楕円礫を素材に選択するようになったと考えられる。これによって石材消費は概ね1母岩から一つの製品を製作すると想定される。それに対し、前琉球縄文式石器群の石材獲得は獲得する石材には板状角礫が含まれるため、石材産地は必ずしも海岸に限らない。場合によっては河川を上流に遡上して岩帯にアプローチする必要があったかも知れない。さらに大形であることを加味すると、石材獲得にはかなりの労働コストを投下する必要のあった石材獲得戦略であるといえる。しかし消費戦略の面からは、本稿で検討を行った野国型石斧の製作技術にみられるように1つの母岩から複数の製品を作出することができるため、緑色千枚岩・片岩の石質を生かした低コストの石斧生産を可能としている。このように石材獲得消費戦略からみて、前琉球縄文式石器群と琉球縄文式石器群の萌芽期には、石材獲得・消費戦略上でも大きな相違点が認められる。

また爪形文系の時期は該地の中で最もイノシシ骨が多量に出土する時期であり、石器組成中に狩猟具が存在せずとも何らかの狩猟具を想定する必要がある。このとき藪地洞穴や新城下原第二遺跡、武芸洞で出土している貝鏃をはじめ、この時期には多くの貝骨製品が出土している。これら貝骨製品に想定されるのは、貝鏃のほかに貝刃、貝錐、骨推、骨製のヤス状製品といった鋭利な刺突具や刃器などである。これと同様の機能をもった石器が出土しないことから、前琉球縄文式石器群は、このような剥片石器の機能を担う道具は貝や骨を素材とした製品を用いていたと想定される。ただし不定形剥片石器を製作する技術をもたないとは考え難いため、剥片石器がみられない要因には、爪型文土器段階の集団は上記の貝・骨等で需要を満たし得ることで、沖縄本島地域においてチャート産地を開拓していなかった可能性が挙げられる。

## 6. 小結

爪形文土器段階の石器群を検討した結果、特徴的な石器組成に加え、野国型石斧とそれを製作するための特異な石材獲得消費戦略から、後続とは異なる前琉球縄文式石器群と仮称し得る可能性について論じた。また後続する曾畠式・条痕文土器段階の石器群には縄文石器の導入がみられることから琉球縄文式石器群の萌芽期と評価したが、この石器群は前琉球縄文式石器群とは共通性がほとんどみられない。従って両石器群間には継承性がみられないと結論付けられる。

今日の爪形文土器段階の研究における大きな課題の一つに、爪形文土器から条痕文土器の時期に文化的な系統関係を探ることができるかという課題が挙げられている。伊藤慎二は土器型式学上では爪形文土器から条痕文系土器への変化を追うことができるとしている（伊藤 2011）。しかし本稿における分析からは、むしろ両時期はそれぞれ異なった文化的背景をもった系統性のない文化ではないかと考えられるのである。また近年は『沖縄県史』においても、爪形文土器段階は貝塚時代早期もしくは新石器時代前Ⅰ期という名称から縄文時代早期という名称が使われるようになってきている（沖縄県公文書館（編）2003）。爪形文土器段階の石斧についても九州以北の縄文文化に伴う石斧と相違しないという指摘もあるが（水ノ江 2005）、本稿の分析結果からはこの石器群に縄文文化の影響を認めることはできず、少なくともこの時代について「縄文文化」という言葉の使用は慎重であるべきと思われる。

本稿は 2011 年に國學院大學大学院文学研究科に提出した博士学位申請論文『石材分析に基づく沖縄先史研究』の「第 2 章 沖縄本島地域における初期石材運用」を加筆修正したものである。

（おおほり こうへい：調査班 専門員）

## 参考文献

伊藤慎二 2011 「先史琉球社会の段階的展開とその要因」『先史・原史時代の琉球列島』 p 43-60 六一書房  
大堀皓平 2012 「沖縄諸島出土打製石鏃の基礎的研究」『南島考古』第 31 号 p 31-40 沖縄考古学会  
沖縄県教育庁文化課 1984 『野国：野国貝塚群 B 地点発掘調査報告』沖縄県教育委員会  
木崎甲子郎編 1985 『琉球弧の地質誌』沖縄タイムス社  
大工原豊 2008 『縄文石器研究序説』六一書房  
東門研治 2000 「伊礼原 C 遺跡」『考古学ジャーナル』 p 26-31 ニューサイエンス社  
新田重清 2000 「沖縄縄文時代主要遺跡から出土する石器の様相について」『琉球・東アジアの人と文化』高宮廣衛古希記念論集（上巻）p1-30 高宮廣衛先生古希記念論集刊行会  
水ノ江和同 2005 「南島の縄文石斧」『南島考古』第 24 号 沖縄考古学会